

芥川龍之介・作 「犬と笛」より抜粋

それから四五日たったある日のことです。髪長彦は三匹の犬をつれて、葛城山《かつらぎやま》の麓にある、路が三叉《みつまた》になった往来へ、笛を吹きながら来かかりますと、右と左と両方の路から、弓矢に身をかためた、二人の年若な侍が、逞《たくま》しい馬に跨《またが》って、しずしずこっちへやつて来ました。

髪長彦はそれを見ると、吹いていた笛を腰へさして、叮嚀におじぎをしながら、

「もし、もし、殿様、あなた方は一体、どちらへいらっしやるのでございます。」と尋ねました。

すると二人の侍が、交《かわ》る交《かわ》る答えますには、

「今度飛鳥《あすか》の大臣様《おおおみさま》の御姫様が御二方、どうやら鬼神《おにがみ》のたぐいにでもさらわれたと見えて、一晩の中に御行方《おんゆくえ》が知れなくなつた。」

「大臣様は大そうな御心配で、誰でも御姫様を探し出して来たものには、厚い御褒美《ごほうび》を下されると云う仰せだから、それで我々二人も、御行方を尋ねて歩いているのだ。」

こう云って二人の侍は、女のような木樵《きごり》と三匹の犬とをさも莫迦《ばか》にしたように見下《みくだ》しながら、途を急いで行つてしまいました。

髪長彦は好《い》い事を聞いたと思いましたが、早速白犬の頭を撫でて、

「嗅《か》げ。嗅げ。御姫様たちの御行方を嗅ぎ出せ。」と云いました。

すると白犬は、折から吹いて来た風に向つて、しきりに鼻をひこつかせていましたが、たちまち身ぶるいを一つするが早いか、

「わん、わん、御姉様《おあねさま》の御姫様は、生駒山《いこまやま》の洞穴《ほらあな》に住んでいる食蠶人《しよくしんじん》の虜《とりこ》になっています。」と答えました。食蠶人《しよくしんじん》と云うのは、昔八岐《やまた》の大蛇《おろち》を飼っていた、途方もない悪者なのです。

そこで木樵《きこり》はすぐ白犬と斑犬《ぶちいぬ》とを、両方の側《わき》にかかえたまま、黒犬の背中に跨って、大きな声でこう云いつけました。

「飛べ。飛べ。生駒山《いこまやま》の洞穴《ほらあな》に住んでいる食蟻人の所へ飛んで行け。」

その言《ことば》が終らない中《うち》です。恐しいつむじ風が、髪長彦の足の下から吹き起ったと思いますと、まるで一ひらの木《この》の葉のように、見る見る黒犬は空へ舞い上って、青雲《あおぐも》の向うにかくれている、遠い生駒山の峰の方へ、真一文字に飛び始めました。

底本：「芥川龍之介全集」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第11刷発行

第7回 青空文庫朗読コンテスト 高校生の部 課題  
芥川龍之介・作「犬と笛」より抜粋

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiya

校正：かとうかおり

1998年12月7日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。